# 和梨の品種

岩垣駛夫

和梨のことがのつた文献で一番古いのは「日本書紀」（西暦七九〇年）といわれ、品種と認められるものがのりだしたのは「書言字考節用集」（一六九八年）に古閑（コガナシ）等、消梨（ミツナシ）等がのつてからのことだといわれている。

**長十郎の発展**

明治二十六、七年頃、神奈川県で、当麻長十郎氏により長十郎が発見されてから、長十郎は昭和六、七年ころの和梨の栽培面積一四、〇〇〇町歩の六割を占むるまでにひろがり、今でも栽培面積の四割位は長十郎であろうと思われる第一の品種になつている。長十郎がこのようにひろがつた動機を富樫氏の書かれたものから抜くと、「発見当時は比較的注意をひかなかつたが、明治三十年ころに黒星病の発生のため当時の栽培品種は殆ど被害を受け全滅の惨状を呈した。ただ長十郎だけが何等被害を受けず非常に豊産であつたため、急に周囲の注目をひいて次第に増殖されるようになつた。その後長十郎の特徴が次第に発揮され他品種を押さえ物凄い勢いで進展するようになつた」と。

**主要品種と新品種**

現在の主要品種は長十郎、二十世紀、早生赤、晩三吉等で、これ等につぐ品種として菊水、八雲、あるいは石井早生、青龍等があり、試作されるとともに今後その中のあるものはのびるかもしれぬと思われるものに、新世紀、清玉、新潟早生、旭、新興、新雪、雲井、翠星等一群の新品種がある。

**二十世紀**

二十世紀は長十郎の発見より早く千葉県で松戸覚之助氏により発見されたものであるが、甚だ黒斑病に弱いために、五、六、七月の降水量が三〇〇粍内外のところが栽培地として黒斑病の多発を押えて経済的になりたつという土地の制限のため長十郎のような迅速な進展はしなかつた。二十世紀の品質は和梨として最高と称されるものであるから、和梨の育種の目標としては栽培の容易な二十世紀の品質をもつたものを作りだすことにあるといえるだろう。

**菊地博士の和梨の品種改良と新品種**

和梨の品種改良は菊地博士によりはじめて可成の規模に組織的に行われ、果皮の色の遺伝関係や偏父性不親和などの新事実が発見されており、新品種として菊水、新高、八雲、相模、松島、青龍、王冠、二宮白梨等が発表され各地に試作された。

**菊水**　は新品種の中生の中で最も嘱目されたもので甘味強く肉質も悪くなく、うまい梨であるが、収量が適地における二十世紀に及ばず、果型扁円、外観のよいものがとれにくく、果梗が早く黒くなつて古びた感じを与える等が支障になつて少し植えられたまま伸びがとまつている。菊水は市場にも見るが、ふり売りに向けられるか、家庭向き、あるいは米国流にいうならローカル・マーケット向きのものといえるであろう。外観を問題にしなくなつたらもつと栽培される品種であると思う。

**八雲**　は早生として従来の品種にない外観品質共に優れ、早生梨として立派に存在を続けている。しかし樹勢が旺盛でなく、収量少く、果実が大きくならないので、栽培が殆どふえない。適湿のやや重い土や灌水の出来るところでは玉のびするので適地には早生梨として栽培が続けられると思う。八雲の大果系で樹勢のよい枝変りでも出れば面白い。

**二宮白梨**

二宮白梨は鴨梨×真鍮で育成されたもので山東ともいわれた。一寸変つた風味で面白い。一時試作されたがあまり話題にもならず菊水や青龍のようにもひろがらず、一部に僅かに残つている程度である。特徴のある形、品質、特異の梨として記憶から消えぬ梨である。

昨年九月、星野先生から「福島から白龍という梨が札幌にきている、札幌愛果会の試食にとりあげたいが、来歴、栽培の現況、将来性等はどうか」との御手紙をいただいた。前に福島で早生赤の青い枝変りを白龍といつた事があるが、それとも違うので、出荷業者から逆にたどつて生産者をつきとめ、木を見たが、二宮白梨らしく白梨を白龍としたものらしいので右の旨を報告しておいた。本年木になつている果実を調べる予定であるが、二宮白梨とすれば、星野先生によつて二宮白梨の価値を認められたことになり、今後本種の増殖の端緒とならぬとも限らぬ。星野先生の注意をひいたことは梨産地として見逃せないことであり、北海道に向くなら栽培を増加してもよい位に考える。

**王冠**

王冠はりんごの黄魁に似た外観である。このような外観は従来の日本梨になかつたものである。食べてあまりうまくないのは困るが、詳しい性質がわかつて王冠に適した栽培が行われればもつと特徴を発揮するように思われる。

**岡山、新潟の和梨の品種改良**

神奈川の外に岡山、新潟等の試験場では和梨の品種改良が行われ、民間で見出されたものもあり、旭、新世紀、新潟早生、新興、新雪、清玉等がこれである。

福島の環境では何れも（新雪はまだ判らないが）長十郎あるいは二十世紀にとつてかわるとは思えない。清玉はもう暫く作つてみる必要があるように思うが、新興もすすめる気がしない。これらの新品種を評判だけを聞いて植えた人があり、出荷に際し品種名の異る小口の荷が種々出てくるので荷の混乱を来たして困る位である。新品種

は先ず試験場で試験して試食等も行つて広く意見も聞き注意深く選んで、県内の組織的な試作に入れ経済価値や木の特性が判明してくるのを待つべきで、新品種から経済品種として残るものがいかに少いかを考えると一般の栽培者はあれこれ迷わぬ方がよい。その土地で果実もみない先から宣伝する方も気が早すぎるし、新品種に異常な興味を持つて無理しても手に入れようとすることもこまりものである。

### 新　雪

新雪は育成者田野さんの所で四月中旬に試食したことがある。貯蔵した早生赤や晩三吉より甘味もあり肉質もよくうまいと思つた。貯蔵梨として注目すべき新品種であろう。

### 興津の品種改良と雲井、翠星

興津の農林省園芸試験場で梶浦博士を主宰者として育成された新品種に最近品種名のついた雲井（ロー五号）、翠星（リー三〇号）がある。雲井は早生の大果で肉質よく八雲より大きいので、その点作つて有利と思う。静岡、神奈川には既に可成りの栽培面積がある。福島以北では甘味が不足で、東北でも太平洋岸の暖い所には試作の必要があるが、一般にはすすめにくい。翠星も福島以北には無理であろうと思う。育成品種中にキー二六号という赤梨がある。果形扁円、端的にいえば菊水を赤梨にしたような感じであるが、独特の風味があり、甘味多く、肉質よくうまい梨である。花芽が少いようで収量もあまり上らぬのではないかと思うが、東北の北の方でも試作してみる必要があると思う。またイー三三号は暖地では日保ちが悪いので殆ど問題にされていないが、福島では日保ちが長十郎に勝るとも劣らず、外観も果点が鮮やかで特徴があり、果形よく円よりやや腰扁で、無袋であつたら長十郎より優る位かもしれぬ。本年は出荷地における日保ちを長十郎と比較検討して、もしよかつたら少し多く作つてみたいと思つている。

### 貯蔵品種

晩三吉は和梨の代表的貯蔵品種で、早生赤も貯蔵梨といえる。晩三吉は新潟、福島以北になるとよい品質が発揮出来ない。冬季梨を食べる人があろうし、冬を越して貯蔵した梨は春の花見ころになると、のどもかわくしやや消費がある。寒い間、砂糖水のような和梨が蜜柑やりんごに伍してどこまで地歩を保ち得るか余程品質のよい新品種でも出ない限り悲観的である。

### 中生の梨青梨、赤梨の問題

和梨は桃の盛りをすぎて、まだ暑い間の、りんごの味が出るまでの初秋の果物と考えると中生重点になる。和梨は桃とりんごやみかんで前後を挾まれている形である。早生梨は桃の晩生種と重なつて梨の季節の来るまでのつなぎである。

中生の梨には前に述べた一群の新品種があり、中には熟期が少し早いものもあるが、何れも水準以上に出るように思えないから、中生は依然長十郎、二十世紀の天下が続くであろう。

二十世紀と長十郎の比較をしてみると果実では外観、即ち赤梨と青梨の問題になる（赤梨は銹褐色の梨をいい、青梨は緑色の梨をいう）青梨と赤梨で何れがわれわれの目に美しく映じるであろうか。人によつては問答無用「青梨さ」というであろう。店頭に並んだ場合、青梨は店に新鮮味を与えるが赤梨は店頭を美しくするといえるであろうか。より美的なものを求める点からいうと、青梨の方に軍配があがりそうに思う。

梨園に働きに来る人に、赤梨を三時に出すと、なんだ赤梨か、この家は長十郎を食わせるのか、といつた顔をし、少し虫がついたり、銹があつても二十世紀を出すと喜んで食べ、土産にも喜んでもらつて帰るのが現実のようである。これは二十世紀の値段、品価から来ており栽培の手数のかかることも一役買つていよう。青梨を高級視する気持は消費者一般にあることは否定し難い。しかし長十郎を食いつけた所や大衆には値段も関係し、赤梨の消費は依然たるもので、気候の関係もあるが群馬、埼玉等には、早生赤の減少も手伝つて、長十郎は増殖の傾向である。

長十郎の無袋栽培をやつて、有袋の二十世紀と食いくらべると、長十郎の無袋の方が甘く、適熟のものを収穫出来るせいか品質までも良いように思う。これまで二十世紀に手を出した筆者も無袋であると長十郎を食べる。

二十世紀の最大の欠点は黒斑病に非常に弱いことである。パラフィン紙の袋掛を廃せないし、ボルドー液の撒布をおそくまで続けるのが普通である。長十郎は木の性質から整枝、剪定が難かしい。枝が期待するように伸びて来ないし、短果枝が逃げる、赤玉が出易い。収量は黒斑病を防除出来れば二十世紀の方が平均にとれやすく、長十郎は栽培技術といつても主として剪定によつてであるが収量に開きがでる。よい腕で二十世紀一〇〇〇貫として長十郎一二〇〇貫位の収量と考えられよう。長十郎の方が収量を上げやすいように思う。長十郎は何処でも作れるが、乾燥しない所、灌水出来る所ならなおよい。二十世紀は黒斑病のために産地に制限をうける。

北海道は九月十日といえば夜など少し多く西瓜を食べるとふるえが出る位涼しい。残暑に梨を沢山食べる事はまあるまい。身体が寒くならない程度に初秋の果物の梨を味うのであるから、大衆的赤梨の長十郎より青梨に嗜好が向いているらしく出荷地としては二十世紀の市場である。

### 赤い色の和梨も夢ではない

中国梨には陽のあたる面に赤色が出る紅梨があり、洋梨のバートレットやプレミッシュ・ビュティー（日面紅）も陽のあたる方に色がつく。ワシントン州シラノマックケルヴィ氏がバートレットの真紅の枝変りマックスレッドを発見したのは洋梨の品種改良として一時代を劃するものである。マックスレッドと他の洋梨との交配によつて赤い洋梨の育成が始められ、マックスレッドはフランスにもわたり、筆者も導入しており、本年は紅い色の効果がみられる。

このバートレッドの赤枝変りの赤い遺伝子の和梨への移入は企てられるべきで、何年かあと、和梨にも赤い品種が出てくることを期待しよう。

（福島県園芸試験場長・農博）